
メタリックフェザーズ

クリアランス

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

メタリックフェザーズ

【Nコード】

N6829A

【作者名】

クリアランス

【あらすじ】

正義って何だろう。悪って何だろう。正義と悪の間にある物を見ることができたとき、答えが見つかるのかもしれない。

opening

彼は夢を見ていた。子供の頃の夢だった。彼は、親しい友人と遊んでいた。彼は、この友人とはずっと親友だと思っていた。この友情は不変だと。だがその友人であるはずの人物は、いきなり剣を抜き、彼に斬りつけてきた。

「え、ど、どうして!？」

「御前は悪だ!」

悲しいとか、悔しいとか言う感情は覚えなかった。ただ、彼がどうして自分のことを悪だなんて言うのかが分からなかった。

- どうしてなんだよ!? 訳わかんねえよ! -

当時の街としてはかなり大きな街の一つである、シンクス。そこから東へ歩いて、3日ほどのところに、草原がある。見通しもよく、盗賊などもあまりでないので、日が落ちるまでにシンクスにたどり着けなかった旅人達の絶好の野宿の場になっている。そこで、一人の旅人らしき男が、あまりすがすがしくない朝を迎えていた。

「・・・・・・、今日もあの夢を見てしまったか。」

男はそう言い、頭を強く振ってその悪夢を振り払おうとした。しかし、まるで影のようにどうしても振り切ることができなかった。仕方なく、彼は出発の準備を整えた。

「さて、行くか。」

男は独り言を言って出発しようとした時、思い出したように、空を見上げて呟いた。

「正義と悪、世の中が、この二つにはつきりと分かれていれば、俺はどんなに楽だっただろうか。」

そして男は上りつつある朝日に背を向け、シンクスへ向けて歩き始めた。

同じ頃、そこから徒歩で10日ほどの国の首都の城で、一人の男が物思いに耽っていた。

「俺は・・・、正しかったのだろうか。」

この男こそが、彼の親友で「あつた」人物である。彼らの関係については、後に語るとしよう。

「・・・いや、正しかったんだ。そうに決まっている!」

そう思わないと、自分が保てないから、やりきれなくなるから、彼はこう思い込むことによって自分を納得させているのだ。

「將軍、会議の時間です。」

部下の声が、彼の思想の時間に終わりを告げる。

「分かった。今行く。」

そう言い、彼は考え事を中断して、重い腰を上げ、会議室へ向かうとしたが、ふと、立ち止って窓から明るんできた空を見上げた。

「あいつも、今頃この空の下の何処かにいるんだろうか。」

これから始まる伝説を、そしてその中心的立場になることを、彼らはまだ知らない。

時は旧ムルグ歴356年。やがて、Silver Cryと呼ばれる長き動乱の、まだ序章に過ぎない時期である。

opening(後書き)

今回の作品が初めての投稿なので、いろいろと未熟な部分もあるかもしれませんがご容赦下さい。二年ほど前から小説を書き始めて、もっと大勢の人に読んでもらいたい、という想いのもとで投稿してみました。これから執筆を続けていききたいと思いますので、宜しくお願いします。

Episode 1 出会い

彼女は、夢を見ていた。いつの頃だったのかは覚えていないが、確かに自分のことの夢だ。彼女は、剣の扱いに優れていた。しかし、周りはそれを認めてくれなかった。

「貴女は女性なんだから剣なんて使えなくてもいいんだ。」

悔しかった。どうして女性は剣を使っては行けないのだろうか。実力を見せつければ、周りも理解してくれると思い、街を襲った盗賊達を自警団に混じって10人ほど討ち取ってみた。すると、周りは彼女を、気味悪がり始めた。同じようなことをしたのに、自警団の方は、尊敬されていた。

やがて、彼女は独りになっていった。そして、彼女は街を出た。旅をしながら、強さを求めた。しかし、何処に行っても最初は女性だから、という理由で甘く見られた。そして、手合わせをしてみて勝つと、気味悪がられた。

「御前は、化け物か!？」

「近寄らない方がいいぞ。」

どうして!？何故私はそんな目に遭わなくちゃ行けないの!？もう、いや!

「.....、夢か。」

彼女は、野宿をしていた。本来なら、女性が一人で野宿をするなど、本来はするべきではない。しかし、彼女は盗賊などが来ても、無傷で撃退することができるし、街の宿屋なんかに行くともた気味悪がられる可能性があるからだ。

「嫌な夢を見たわね。」

そう言いながら彼女は周りの景色を見渡した。彼女の耳が剣と剣とがぶつかり合う音を聞きとめたのは、その直後だった。

男は、追われていた。それも、十数名の騎士達にだ。普通なら、襲われた地点で十数名対一人ではあつという間に骸と化してしまう所だが、しかしこの男はかなりの実力を持っていた。何とかはじめの乱戦状態を数名倒してくぐり抜け、こうして逃げているというわけだ。ただ、もちろんこの男も、このまま走り続けて撒いてしまえるとは思っていない。ここは、見晴らしのいい街道だし、逃げ込めるような森などの視界を遮る物もない。下手に走り続ければ体力がきれてしまう。そこを無数の刃に襲われることになる。だから、体力がいくらか残っているうちに、戦いに適した場所を見つけてそこで敵を迎え撃つつもりでいるのだ。しかし、走れども走れどもそんな場所は見つからない。

「仕方ないか。」

男は舌打ちをすると、仕方なく街道から少しそれて草原まで走るとそこで敵と向かい合った。一斉に敵が男を取り囲み剣を向ける。しばしの間、剣と剣がぶつかり合ったが、所詮結果は知れている。人数が断然違つ上、男は長旅をして疲れてきている。それでも男が何とか踏ん張れているのは、男の実力と、男が使っている剣の御陰だろう。男は、そこらでは手に入らないかなりよい剣を使っていた。男は、何とから人ほど切り伏せることができたがそこで体力の限界が来てしまった。これまでか、と男が思ったその時、騎士達が此方側をじつと見て、呆氣にとられているのに気がついた。つられて男も振り返った所、思いがけない光景が目飛び込んだ。なんと、女性が此方に走ってくるではないか。それが、普通のか弱そうな女性なら、男はなんとしてでも彼女を守ってやるべきなのだ。しかし、その女性はそのような人ではなかった。彼女は手に剣を持って、此方に走ってくるのだ。

「一人に多数とは卑怯な！助太刀いたします。」

そこで騎士の一人が我に返り、彼女に斬りつけた。いや、斬りつけ

ようとした。剣が、彼女の身体に迫る。誰もが、次の瞬間には彼女は骸と化すと思った瞬間、騎士の剣が宙を切った。

「なっ！」

騎士が驚いたときには、

「遅い！」

という声と共に、後ろから深く剣が突き刺さっていた。何が起こったのか分からずに絶命した騎士を尻目に彼女は次々と騎士達を相手にしていく。

「何をしているの？私一人に戦わせるつもり？」

彼女が男に抗議の声を上げたとき、男もようやく我に返り戦闘を再開させる。騎士達も再び剣を振るい始めたが、元々互角よりも少しばかり男が不利な状況であつたのだ、体制は逆転した。

「一人を相手にこれだけの人数でかかるとは、卑怯な奴らね。」

闘いが終わり、彼女がそう言ったとき、地面には10人ほどの騎士達の死体が転がっていた。残りの騎士達はこれはかなわないと思い、皆逃げていった。男も、あえて追おうとはしなかった。

「助太刀、感謝する。」

男は剣を振って血を落としてからさやに収めながら言った。女性も剣をさやに収めながらきいた。

「ところで、彼らは何者なの？見たところ、何処かに使えている騎士達みたいだけど、主人がいる騎士ならこんな卑怯なまねが赦されるはずは……」

「……」

男が黙り込んでしまったのを見て、女性は詮索を止めることにした。「まあ、言いたくないことを無理に言わせるのは私の好む所ではないわ。ところで、貴方はこれから何処へ向かうつもりなの？」

女性が尋ねると

「とりあえず次は進はシンクスへ向かう。そこから船でウィングストニアへ向かう。」

ウィングストニアとは、現在二人がいる国、ティルギスの東側に位置する国である。ティルギスからウィングストニアへ向かうにはたいていの場合、シンクスから海路で行くのが一般的である。

「ウィングストニア、今は少しばかり政府で揉め事が起きたとかきいたことがあるわ。何でも、ザーク騎士団の騎士団長が謀反の疑いで国を追放されたとか。」

その言葉に、男は少しばかり困ったような顔をして

「ああ、そっらしいな。」

と言った。

「ところで、御前はこれからどうするのだ？行く当てはあるのか。」
すると彼女は、すましてこう答えたのである。

「できれば、私も一緒に行かせてくれるとありがたいんだけど。」

男は、すぐにその言葉の意味が飲み込めず、

「はあ？」

と間の抜けた声を出してしまった。

「だから、一緒に連れてって欲しいんだってば。」

「馬鹿を言うな、詳しいことは話せないが、さっきのことでも分かったと思うがこれから行く先は俺を狙う人物達がうようよいるところなんだぞ。とても女性を連れて行くわけにわいかない。」

その時、男は女性の気配が変わったのを感じた。

「女性だから連れて行けないってわけ？その人がたとえ十分な実力があっても？そして、男だったら弱くてもつれていくというのか？女よりも男が強いなんて誰が決めたんだ！おい！」

さすがの気迫に男も少し押された。

「わ、分かった『女性だから』連れて行けないのではない。これから先が危険なんだからそんな簡単にさつき知り合った人を連れて行くわけにはいかないのだ。」

「じゃあ、一人でそんな危険地帯に乗り込んでいくわけ、当然、何か目的があるんでしょう。その目的を果たせないまま殺されてもいいの？」

「・・・・・・・・・・」

「今知り合った人を連れて行くわけには行かないという理由で無駄死にするなんて、私はまっぴらごめんだね。」

男は、少し考えたあと、突如笑い出した。

「な、何がおかしいの！」

「いや、一見は可憐な女性が、そんなことをぺらぺらと喋るのがおかしかったのさ。それよりも、そうだな。強い味方が欲しかったのは本当だし、できればついてきて欲しい。でも、本当にいいのか？途中で殺されるかも知れないんだぞ。」

女性もまた笑いながら答えた。

「望むところね。私よりも強い人間を見つけられて、そいつに殺されるのなら本望だわ。」

どう間違えれば美しい女性の口からこんな台詞を出てくるのだろうか。そう思いながら男は言った。

「それなら有り難い。これから協力してもらおうしよう。」

「じゃあ、一応自己紹介をしておくわね、私はリシア＝ルーティン＝ティルス、リアと呼んでくれればいいわ。」

「俺は、ギルティス＝リースン、ギルスと呼んでくれ。」

そこでリアはこの名前は何処かで聞いたことがあるような、と思ったが口にはしなかった。

「さて、出発するでしょう。早く行かないと彼らが戻ってくるかも知れない。」

しかしリアは急ぎ出発しようとするギルスを制止した。

「少し待って、私、野宿をしていて起きてすぐにここに来たの、だから、いろいろと身支度が。」

「どのくらい時間がかかるんだ？」

「30分くらい。」

「30分！？」

男はかなり驚いた。何をすればこんなに身支度に時間がかかるのだろうか。自分はせいぜい5分程度で身支度など調えられるのに。

「何をすればそんなに時間をかけることができるんだ？」

「髪をとかしたり、服装を整えたり、身だしなみをいろいろと。」

そう言うとりアは早くも野宿していた場所へと走っていつていた。

「やれやれ、こういう所は女性らしいんだな。」

心強い味方だが、少し面倒そうな人だ。彼はそう思いながらウイングストニアの方を見つめた。

彼の旅は、まだまだ始まったばかりである。

Episode 1 〽出会い〽 (後書き)

エピソード1を書きました。やっと、ストーリーが進行し始めた感じがします。これから宜しく願います。

Episode 2 王の失踪

ウィングストニアの首都であるウィザニアの、中心的な建物であるウィザニア城では一人の男が苦悩していた。

「あー、もう嫌になってきた！」

彼の名前はエシル・バーティス、ウィザニア軍の最高権威である4人の將軍のうちの一人である。しかし、最近は特に戦争もなく平和そのものであり、彼の仕事は主に所謂デスクワークばかりである。今日も、書類の整理を彼はしているという訳だ。

「大体、將軍になったって一つもいいことなんかないし、名前だけってやつだな。」

そんなことを言いながらふと彼は窓へと目を向ける。

「………ギルス。」

彼はかつては親友であった男の名を呼ぶ。幼い頃から二人は親友であった。しかし、彼は突如悪となった。この場合の悪とは、エシルからギルスを見ての悪である。

「………気晴らしに出かけるか。」

そう言うとは彼は部屋の照明を少し回した。すると、その隣の壁の一部が横に動いて、隠し通路への入り口が現れたのだ。

「さて、夜の街へ出かけようじゃないか。」

ウィザニア城が建設されたときはウィングストニアはティルギスとの戦争の真っ最中であった。だから、もしも仮に城が襲われたときに重役達が逃げられるよう城のあちこちに隠し通路を使ったのだ。

そして、戦争が終わり、城を当てた人物達や隠し通路のことを知っている人物達もいなくなり、今では隠し通路の存在を知っている者は一部の人間でしかない。エシルもその一人である。彼は去年まで執事であった者が城を出て行くときに隠し通路の存在を教えてもらったのだ。

ウィザニアの町で有名なウィリユース剣技場。ここでは、剣の腕に自信のある者達が集まり、手合わせをしたり、剣の技術を教えあったり、情報交換をする所だ。そこへ、新しい来訪者が訪れた。

「よう、ヒューリス。今日は来ると思ってたぜ。」

ヒューリスと呼ばれた来訪者は笑みを浮かべながら男の隣に座った。「ああ、たまには息抜きをしないとな。」

ヒューリスとは、エシルが街に来るときに使っている偽名である。エシルはここでよく剣の腕を磨くのだ。

「ところで、ヒューリス。新しい情報を入手したぜ。」

「何だ？聞こうじゃないか。」

「実はな、今は城に王が居ないんじゃないかという話が持ち上がった。てるんだ。」

彼は、驚きのあまり持っていたグラスを落としそうになった。

「そんな、馬鹿な！」

本当にそんなはずはないのである。もし本当に王が居ないのなら將軍である自分が知らないはずがない。しかし、この男の情報はいつも確かで外れたことなどないのだ。彼が將軍であるなどとは夢にも思わない男はさらに続ける。

「そう思うだろ、でもな、城に使えている者の話では最近王は部屋に閉じこもってばかりで全く部屋からでない。そして、一度用があつてドアを通して話をしたらいいんだが、その時の王はいつもと少し違い、何か違和感があつたそうだ。これらのことからだな、今城にいる王は実は替え玉何じゃないかと思う。」

「なっ！」

「何か事情があつて入れ替わつたのか。よからぬ事をたくらんだ奴が王を殺すか何処かに閉じこめるかして、自分が王に成り上がったのかも知れない。」

エシルは、二の句が継げなかった。もし、王が何者かの陰謀で入れ替わつたのではなく、自らの意志で入れ替わつたのだとしたら、王

が何処へ行つたのかはエシルには想像がつく。

「ティルギスへ行つたのか!？」

「え?」

ヒューリスに不審な目で見られたので、エシルは慌てて

「いや、何でもない。ちよつと急用を思い出したから今日はもう帰る。」

と言つて外へ出た。

冷たい風が彼の身体をさましていく。もう秋の終わり頃である。

「陛下の御出身はティルギスだからな。恐らく、ティルギスに助けを求めに言つたのだろう。」

城の中で、最近不穏な動きがあることは彼もうすうす気づいていた。貴族や騎士団達が大臣を味方につけて王宮乗っ取りをたくらんでいるのだ。そこで、王は城を逃げ出すも同然の形で姿をくらましたのだ。ただし、自分が蒸発してしまえば、城を反逆者達に開け放してしまうも同然になってしまう。そこで、替え玉を用意していったのだ。

「確か、ギルスもティルギスへ行つたんだつたな。」

陛下は、もしかしたらギルスに会いにいたのかも知れない。ふと、そんな考えが彼の頭に浮かんだ。陛下はギルスのことをかなり頼りにしていたのだ。

「やっぱり、陛下は俺では頼りにならないと思ひなのか?」

彼も、謀反が起こつたときには陛下を守るために全力で戦う覚悟でいた。しかし、陛下は自分ではなくギルスを頼りにした。悔しかった。そして、悲しかった。何故自分はいつもギルスに負けてばかりいるんだろう?

「いや、違つ!俺は勝つたんだ!奴を城から追い出したじゃないか!」

じゃあ、どうしてだ?何故こんなに涙が止まらないんだ?本来なら、笑うべきだろう?長年のライバルを、宿敵を追い払つたのだから。

彼は、どうしても、涙が止まらない理由が分からなかった。

Episode 2 王の失踪（後書き）

三話まで読んでいただき、ありがとうございました。もし宜しければ、今後の執筆の参考にしたいので読んでくれた感想をコメントとして送っていただければ幸いです。

Episode 3 〱再会〱

大勢の人でにぎわう大都市、シンクス。今日は休日なのだが、やはり、人の動きは耐えることがない。そんな人混みの中に混じって若い男女が歩いていた。一見、休日に二人で出かけている恋人に見えなくもないのだが、二人とも腰に剣を持っている所を見ると、そんな者ではないらしい。

「ところで、すぐに港へ行くの？」

女の質問に男が答えて

「いや、少し休んでから言ってもいいだろう。」

と言い、酒場に向かって歩き出した。

酒場は昼間なので少しすいていたが、それでも、人は多い方だった。二人はカウンターに座った。

「ウィルム酒を。」

「わたしもそれで。」

すると、男は慌てて窘めた。

「おいおい、かなりきついぞ。」

しかし、酒場のマスターは平気で2杯のウィルム酒を持ってきたので男は呆れてしまった。さらに女はそのウィルム酒を一気に飲み干してしまったのだ。

「おいしい。」

開いた口がふさがらないとは、こういう事を言うのだろうか。男は、すぐにその光景を認めることができなかった。ウィルム酒とは、大の男でさえ2杯も飲めば倒れてしまうほどきつい酒なのだ。それを一気に飲み干して平然としていられるとは……。

「なあ、リア。」

「なに？」

男は言葉を選ぶようにして声を出した。

「御前の身体は一体どうなっているんだ？」

リアと呼ばれた女は、楽しそうに答えた

「別に、普通の身体じゃないかしら？ ギルス。」

ギルスという名の男もこの地点で既に杯を半分ほどあけているのだが、この飲み方でも十分早い。

「御前には驚かされっぱなしだな。」

「型にはまらないというのが私の生き方なの。」

ギルスはさらに呆れたが、いつまでも彼女の話を聞いていても仕方がないと思ったのか、今度はマスターに話しかけた。

「なあマスター、何かウィングストニアのことで変わったこととかを聞かないか？」

「そうですねえ、あ、そうそう、そういえば、イリス将軍が、将軍からおろされたりらしいですよ。」

「なんだって！？」

ギルスはよほど驚いたのか、机を強く拳で叩きながら言った。

「じゃあ、将軍が三人になっちまうじゃないか。」

「いえいえ、代わりにルシアス殿が将軍に昇格なさったとか。まあ、ギルティス将軍も城を追放されて、代わりに、無理矢理ともいえるやり方でエシル殿が将軍に昇格なさったばかりだというのにねえ。」

ここでリアは驚きのあまり声を出しかけたがギルスが視線を送ってきたので黙っていることにした。

「あるときもただの近接騎士団の指揮者だった者がいきなり将軍になんて、ということでかなりごたごたがあったというのに。これではまた国民の不満の声は高まりそうですね。」

酒場を出たあと二人は黙って港へと歩いていった。

リアの方はギルスが実は元将軍であることについて聞きたいのだが、ギルスが先ほどから黙っているので聞くに聞けない状態なのだ。

ギルスの方はさつきマスターから聞いたことについて考えを整理している真っ最中なのだ。

二人は無言のまましばらく歩いたが、ふとリアがギルスの方を見ると、ギルスの姿が見えない事に気づいた。慌てて振り返ってみると、自分から５メートルほど後ろに彼の姿があった。リアはギルスとは反対側の方を見ながら歩いていたので、彼がいきなり立ち止まったことに気がつかなかつたのだ。彼は、リアの斜め後ろあたりを、驚愕の表情で見つめていた。不思議に思い、彼女もそちらの方向を見てみた。

そこには、一人の男が立っていた。年は30代前半といった所だろうか。しかし、その整った顔立ちと、とてもたくましい体と、腰に付けた長剣が彼を若く見せた。

「ギルス、彼がどうかしたの？」

「
・
・
・
・
・
うだ。」

「え、よく聞こえない。」

「王だ。」

「はい？」

「このお方こそが我らの陛下、ウィングストニア国王だ！」

「ええええええええ——！！！」

Episode 3 〽再会〽 (後書き)

しばらく放置していてすみませんでした。これからも宜しくお願いします。

Episode 4 ヲウイングストニア国王暗殺計画

「それで、どうして一国の將軍と王ともあろう人がこんな所にいるの？」

リアがいい加減きかずに入られないといった感じで尋ねた。

「まあ、おまえもさっきの酒場の人の話で俺がここにいる理由はだいたいわかったと思うが」

「ええ、それは大体わかったわ。」

そこで、リアは困惑に満ちた表情になって、

「でも、こちらの国王陛下までがいらっしゃるのはどうということなのかしら。」

と早く事態を理解させてほしいといったふうと言った。

「それは俺にもわからない。俺も陛下は城中にいらっしゃるものだとばかり思っていた。」

「それでは、私がここにいる理由を説明してもよろしいかな？」

それまで黙っていた国王が、口を開いたのできるすとリアはあわてて口を噤んだ。

「最近、城の情勢が不穏なのはギルティス、御前も知っているだろう。」

「はい。將軍の急な解任とエシルとルシアス中尉が昇格したと聞いたときから何かを感じてはいましたが、まさか王が城を出てくるほど凄いことになるとは思いもよらず・・・。」

「実は、私の命は狙われているようなのだ。」

二人とも、事の深刻さに思わず息をのんだ。

国王の暗殺を企むということは、そこらの貴族を暗殺するのとは訳が違う。失敗すれば死刑は当然、しかも成功する確率はよほど腕に自信がない限り、0に限りなく近い。にもかかわらず暗殺を企むということは、そのリスクよりも暗殺によって得られるものが多いということなのだ。そのくらいのことは城のことについてはあまり関

わりのないリアでも知っている。

「確かというわけではないが、そうである可能性は高い。まあもちろん、最近の物騒な事のせいで私が敏感になりすぎて被害妄想を抱いているだけなのかもしれないが。」

「陛下は何処からその情報を？」

「そのことの密告の手紙が私の部屋に置かれていた。私が部屋にいない間におかれたのだ。」

「その手紙を信じたのですか！？」

「たったそれだけで危険を冒してまで城を出てこなくても言いたげな様子でリアが言った。」

「いやリア、当然のことながら陛下の部屋は厳重な警備がしかれている。そこに手紙を置くというのは容易なことではない。かなりのリスクを覚悟で忍び込んで置いたのだろう。そんなことをいたずらなんかでするはずがない。」

とギルスが言うと、国王が

「しかし、私を脅かして何かにはめると言うことは考えられるがな。まあ、私もギルティスと同じような考えで城を抜け出てきた。」

「しかしどうやって？そして、陛下がいなければ今城はどうしているのです？」

「もちろん、私がいなければ城は機能しなくなってしまっし、謀反を企む奴らの思っつぽになっってしまう。そこでだ、私は今ちゃんと城にいる、ということにしてある。」

「いや、居ないじゃないですか。」

「もちろん口上だけそうしてあるだけだ。つまりは俺の部屋には信頼できる部下、名前は伏せるが、とにかくそいつが居て、俺の代わりになってもらっている。」

「でも、いろいろな人たちが用事があってくるのではないですか？」

「私は今は少し気分が優れない。重要な用事だけドア越しに話すようにしている。」

「いや声が全然違うでしょう。」

「少し鼻声だということにしてある。」

「……………」

「ウイングストニアが少し心配になってきたな。」

「兎に角、私がなぜ御前のところにきたのかというと、御前が一番信頼できるやつだからだと思ったからだ。」

「え、俺がですか？」

「そうだ。」

「いや、しかし俺はあまり賢いというわけでもないし、実際俺の知らないうちに將軍から俺を下ろす計画が着々と進んでしまっていたみたいだし、それに全く気づかなかつたし、自慢できることといえば剣の腕くらいだが。」

ギルティスはウイングストニアでは唯一エシルと互角に戦える騎士として知られているが、勝負は時の運とも言い、必ずしも二人がウイングストニア一強いというわけではない事を記しておく。

「だからこそ私は御前を信頼するのだ。頭があまりよくないやつは謀反を企むなんて事も考えつかないからな。忠実さにおいては一番だ。」

「褒め言葉として受け取っておきます。兎に角、これからどうするのですか？」

「私もいつまでも城を替え玉で通すのは無理がある。そろそろ城に戻らなければならぬ。しかし、まさか御前はウィザニアには入れまい。顔を知られすぎているしな。」

「それなら、リアを城内に置かれてはいかがでしょうか？」

「気になっていたんだが、そちらの女性は？」

「彼女はリシアルーティン・ティルス、旅の途中で助けてもらった、命の恩人であり、戦友です。」

しかし国王はまさかこんな女性が武術でギルスを手助けたとは思わない。きつと誇張で言っているのか、敵から逃げているときに匿ってもらったのだろう程度に彼は考えた。そして、城に置くという意味も、自身に何かあったら、急いでギルスに伝えに行くという役目だ

ろうと思った。まあしかし、ギルスがそこまで言うほどの女性だ、信頼はできるだろうとも思った。

「分かった。彼女に『護つて』もらうとしよう。」

国王は半分軽い気持ちでそういった。彼女が最高の護身兵になることを彼はそれほど遠くないうちに知ることになるのだが。

Episode 4 ヲウイングストニア国王暗殺計画(後書き)

久しぶりの投稿となつてしまいました。長い間放置してしまい、本
当に申し訳ありませんでした。

Episode 5 友情の誓い

「暇だ。城の生活ってこんなにも暇だったの。こんな所にすんでる人の気が知れないわね。」

ウイングストニア城にリアがきてから一週間がたった。まあ、彼女が暇だというのも無理はない。何しろ国王は彼女がこの城にきたとき、彼女を国王専属の小間使いとしてしまったのだ。もちろん、城内は上を下への大騒ぎになった。当然のことながら、国王には既に身の回りの世話をするものは何人でもいる。それを今更になって、専属の者を欲しがるのは、普通の人は考えない。そんなのは口実で、実は想いをはせているのではないかと考えるのだ。しかし、相手は出身もしれぬ庶民である。もちろん、妻になど当然できないし、愛妾にすることすらかなりの反対を受けるだろう。だから、小間使いとして側に置いたのだ、と考えればすべてつじつまが合うからだ。だから、国王の愛人？かもしれない人にそんなに仕事が回ってくることはないし、だいたいそもそも国王の身の回りの世話をする者はすでにいるのだから、リアがきたところで彼女がすることなど何もないのだ。そして、特に国王が暗殺されるような様子はない。だから、彼女はものすごく暇なのだ。数少ない仕事といえば、興味本位で自分と国王との関係を聞いてくる小間使いに納得のいくような適当な返事を聞かせてやることと、国王が暗殺されないか見張っていることぐらいである。

「まあそういうな。私だって好きでこんなところに住んでいる訳じゃない。」

そう国王が聞くと、リアは少し驚いた様子で、

「え、国王という身分は好きじゃないの？」

と聞いた。当然である。国王という身分は誰もが喉から手が出るほどほしいと思うのが普通だと思っているからだ。

「ああ、前王が亡くなったとき、不幸なことに跡継ぎが誰もいなく

てな、国王不在の状態が長いこと続くと国の存続が危うい。ということで当時絶大な国民の支持を得ていた私が飽くまで（とりあえずの）国王になった訳なんだ。」

「でもそれって変じゃない？普通跡継ぎのいない国王なんているの？」

「まあ普通はいない。だが前王の場合は就任してたった一年で急病で休止してしまったのだ。心臓の病だったらしい。まさか就任して一年で亡くなってしまうとは誰も考えなかったからね。当然陛下本人も跡継ぎのことなんて全く考えてなかったのだろうよ。」

「でも、ギリアは飽くまで仮の王様なんでしょ。どうしてまだ玉座に収まっているの？」

リアは国王のことを呼び捨てでギリアと呼ぶ。もちろん、国王に向かって敬語も使わずこんなになれなく話すのは普通なら許されないことだが、リアは「私は本来ウイングストニアの国民じゃないからウイングストニア国王に敬意を表す必要もない。」というほとんど無理矢理な理論を生み出してしまったのだ。因みに、彼女の出生地はウイングストニアの北に位置する国サウスライトの辺境の村スノフリースらしい。そして、ギリアもそれを許容しているのだから、彼もかなりの心の広さである。「国王になつてからというもの、皆に敬われまくるのが少し嫌になつてきてな、ちょうどよかった。」と言っていた。悪く言つと変人である。しかし、この無粋さも彼が国民の支持を集めた理由の一つでもある。因みに、彼の名はギリアリス。ウイングストニアである。ウイングストニアでは、国王一族は代々ウイングストニアの名字を持っていたので、彼は国王就任時に就任中だけと言うことで名字を変えたのだ。しかし、彼女がギリアと親しくすればするほど、ギリアとリアは恋愛関係説が確信を得ていってしまうのだが。

「うん、それはだな、私はすぐにもっと適任者が現れるだろうと持っていたのだが。」

「当てが外れてしまったわけだ。」

「ああ、当てが外れ続けて早3年だ。」

ところ変わってここはウィングストニア城下町の一般人にはあまり知られていないが彼らの生活に必要な場所。もしここがないと生活排水が溢れてしまい衛生に非常に悪影響が出る場所である。つまりは地下下水道である。ここに一週間前からある人が（いやいやながらも主君のために）暮らしている。

「くっさ、もう、ここ、嫌。」

ギルスである。彼は町中に出るわけにはいけないので、ここで暮らしているのだ。国王は、『そんなところで暮らさなくても町の近くのシュリープス村あたりでいて、異変があればすぐ来てもらえればいい。』と言ったのだが、忠誠心が非常に強い彼は、『いえ、そんなところにいたのでは、陛下の元へいくのに数時間はかかってしまいます。陛下のためなら少々の生活の不便くらい、何とも思いません。』と言ったまではよかったのだが、彼自身、ここまで地下下水道が酷いところだとは思っていなかったのだ。で、このさまである。

「はあ、こんなことなら陛下の言ったとおり、シュリープスに居ればよかったかなあ。」

後悔先に立たず、である。そこで彼はふと、自分の剣に目をやる。そしてその柄に刻まれた文字をみて、溜息をつく。

「エシル・・・・。」

その文字は、彼が將軍に就任したときに、エシルと二人で互いの剣に友情を誓い合ってそれぞれの剣に文字を刻んだのだ。

「必ず、決着をつける！」

”この剣に賭けて、この刻み込んだ文字よりも深く俺たちの友情は刻み込まれ、続いていくだろう。”

E p i s o d e 5 友情の誓い (後書き)

M e t a l l i c F e a t h e r s を読んでいただきありがとうございます。
ございました。これからもよろしく願います。

Episode 6 〱 味方〱

何処の世界にも、人の物を盗る職業は存在する。まあ、すなわち盗賊である。此処、地下下水道にもそのような人が現在約2名。

「ねえ、本当に此処で合ってるの？」

「・・・多分。」

「多分！？ちよつと、あんたの情報を信じてこんな臭いところまで遙々《はるばる》と来たのよ！」

かなり揉めているようである。

「ちよつと聞いているの？オーシャ！」

オーシャと呼ばれた青年がそれはかなりめんどくさそうに答える。

「いや、でもこの情報はあまり確実性がある物ではないって言ったけどエリシアが『行ってみなきゃ本当かどうかなんて分からないじゃない！』的なことを言って俺を無理矢理連れ出したような・・・」

エリシアと呼ばれた女性めんどくさそうなオーシャとは対照的にあっさりと答えた。

「あんたの思い違いでしょ！」

事のあらましを簡潔にまとめてみよう。オーシャがあまり確実ではないが

「地下下水道から城下町のお屋敷であるリーラ屋敷に忍び込める」という情報を掴む。それをエリシアに伝える。行きましよう！！
真実とはまとめてみると実に簡単な物である。真実は簡単すぎてかえってなかなか分からないという過去の偉人の言葉があったような、無かったような。

そして現在の状況を言うと、その屋敷に繋がっているはず、のマンホールを開けようとしてオーシャが悪戦苦闘しているわけだ。

「ロックは掛かっていないみたいなんだけどなあ。上に何か載せているのかも。」

「つかマジで早く開けてくれない。この臭いがもう何というか、腐った卵と温泉の臭いが混じったみたいな臭いじゃない。」

温泉のあの独特の臭いは大体硫黄の臭いでそれをふらんじゅう孵卵臭と表現する。だから二つの臭いを混ぜても結局孵卵臭だと言うことを彼女は知っているのだろうか？

「ん。お！持ち上がった・・・」

「あ、開いたの？」

開いたには開いたのだが、彼は恐らくマンホールの蓋にしてはえらく軽いことに気づいたはずだ。それもそのはず、彼一人で持ち上げたのではなく、上にいる人たちも同時に蓋を持ち上げたのだ。上にいる人とはすなわち、

「動くな！もう逃げ場はないぞ！」

屋敷の警備員である。

「オーシャの馬鹿ああああああああ！！バレてるじゃない！！」

「あれ、何でばれたんだろ？まあ、兎に角、『逃げた方がいいですよ』的な空気がめっちゃ漂ってるようだね。」

やはり二人の態度は対照的である。

「待てー！！」

「待てって言われて待つ馬鹿がいるもんですか。」

「ああ、あれって犯人に対する心理的な効果と人混みに逃げ込まれたときに大声で『待て！』って言うとなりの人がみんな立ち止まって犯人だけ逃げるから見失うことがないのと上手くいけば周りの人に身柄の拘束の協力を得られるかもしれないから言うらしいよ。」

「ふうん。って！あんたの雑学はどうでもいい！少なくとも今は！」
バシャバシャと、下水が撥ねる音と警備員の声が静かな下水道を満たしていく。二人とも此処で捕まっては大変と必死で逃げるが、警備員も必死だった。何を隠そうこの警備員達ここ最近のスランプ続

きで次に仕事を失敗すればクビ！といわれているのだった。しかも
よりによってその次の仕事が盗賊の逮捕なのだから失敗すればもう
100%クビである。

「はあ、はあ、はあ。しつこいな彼奴ら。」

「オーシャ！前！」

「っ！うそおおおおおおお！」

彼が叫ぶのも無理はない。なんと前は行き止まり、ではなく、
・・・、剣を構えた男つまりはギルス、がいた。

「挟み撃ちよ！どうしよう、このままじゃ。」

「こうなったら、戦うしか！」

ところが、二人がそれぞれ武器を手に持とうとしたとき、その男が
二人の前に出た。要するに二人と警備員達の間に入った。

「御前ら！二人に対して五人がかりとは臆病極まりないな！その腐
った性根を叩き直してやる！！」

「「え？」」

この台詞は二人と五人が発した物である。二人にしてみれば、前か
らも攻めてきていたと思っていた敵が急に自分たちを守ってくれた
のだ。で、警備員達にしてみれば、一般人が盗賊の逮捕に協力して
くれる、と思いきや、いきなり自分たちに剣を向けたのだ。

「いや、そいつらは盗、」

必死で誤解を解こうとする警備員達だが、

「問答無用！」

瞬時に五人とも戦闘不能に至らしめた。

「ふう。大丈夫だったか？御前ら。」

こういうのを

「偽善」ということができるのだろうか？まあ、無知は罪なのであ
る。

「えっと、あの・・・。」

二人がどう言おうか迷っているうちに新手が来た。

「待てー！」

「彼奴も盗賊仲間みたいだぞ。警備員達を倒しやがった！」

「……」

三人とも一瞬の沈黙。最初に口を開いたのは、ギルスだった。

「え、御前ら、盗賊？」

「はい。」

あつさりと肯定する。

「待て待てー！！！」

今度の追っ手は明らかに三十人はいる。

別にまだ何も被害は出ていないのだから、そこまで頑張つて追いかけてなくても、と思うだろうが、実はウィングストニアでは、犯罪者を捕まえた者には国から賞金が出るのである。まあこの場合は警備員達の雇い主であるリーラ屋敷の主人がもらえるのだが。警備員達は単にクビにされたくないだけである。盗賊をとらえて主人が賞金をもらえれば、しばらく自分たちのクビは安泰だろう。そういう魂胆である。

「まあ、とりあえず、逃げませんか。」

オーシャが、至極^{もつと}尤もな提案をする。

「そうだな。」

ギルスも大賛成だ。勿論、エリシアも。三人とも意見が一致したところでおいかけてこ再開である。

「待てー！！！」

「待つもんですか！」

（数十分後）

「ふう、何とかまいたみたいだな。」

「ええ。」

「ところでおっさん。」

ギルスは、おっさんというのが自分のことだと理解するのに数秒を要した。それから、言った。

「俺はまだおっさんといわれるような年ではない。」

「じゃあ、じいさん。」

「斬るぞ。」

どうやら加齢に対してコンプレックスを抱いているようだ。

「悪い悪い、冗談だって。ところであんた、名前は？」

彼は、本名を教えようかどうか悩んだ末、止めた。今の自分の名前はウイングストニアの人には伝えない方がいいだろう。

「イース。」

彼が昔、こっそり町に出て一般人のふりをして遊ぶときに使っていた名前だった。

「俺は、オーシャ。そしてこっちがエリシアだ。まあ、大体俺達のこととは分かったと思うが、まあ、盗賊、的なことをしている。」

「で、良く言くと俺は御前らを助けた。悪く言くと犯罪者に加担しちまったというわけか。」

つくづく可哀想な男である。

「まあそう嘆くなって。俺らにとっては命の恩人だからな何でも聞いてやるぜ。なんか盗んできてほしい物があつたりしたら、」

「生憎無い。」

「そうか。物だけでなく、情報とかも手に入れられるけど。」

「情報！？」

そこで男は反応した。

「ああ、盗賊業には情報の入手が必須だ。専門の情報屋に頼む奴もいるが、俺は自分で情報の入手もしているからな。大体の入手ルートは網羅してるぜ。」

「……、国王の暗殺、に関しての情報が欲しい。」

Episode 6 〵味方〵 (後書き)

かなり久々の投稿となつてしまいました。これからも宜しく願います。

Episode 7 計画

「国王陛下の暗殺、ねえ。」

「ああ、実は、」

「いや、そっちの事情なんてのは話す必要はない。」

相手の事情を細かく聞いてはいけない。情報屋の基本である。

「何とか調べてくれ。頼む。」

しかし、オーシャは以外にもあっさりと答えた。

「いや、わざわざ調べる必要はねえ。」

「と、言つと？」

彼は、真剣そうな表情で口を開いた。

「エリシア、例の事だがイースになら話しても良いだろう？」

「ええ、私は異論はないわ。」

「この城下町の外れに、『水平線』ホライズンという秘密組織、まあやってる

ことは暗殺業だけじゃなくヤバげな依頼は何でもこなす、そのかわり依頼料は俺らから見たらゼロをいくつか間違えて多くつけていませんか的な額なんだが、まあそういう組織があるんだ。で、まあ、

そこに国王暗殺の依頼が舞い込んだ、らしい。」

「らしい？」

最後の語尾が気になったのかイースもといギルスが尋ねる。

「いかんせん、この情報は本当に門外不出の極秘なのよ。本当は私たちも他言無用にしていたかったんだけどね、まあ、貴方は恩人だし。」

「そうか、で、その依頼主は？」

「それが、俺も知っているあらゆるツテを使って調べてはみたんだが……。」

「分からない、ってか。」

「ああ、悪いな。」

「いや、いいさ。それだけでも十分有り難い。」

さて、とギルスが腰を上げた。

「そろそろ俺は行く。この事を伝えなければ、」

「まあ、待てよ。」

突如、オーシャが呼び止めた。

「ん、何だ？」

「俺の知り合いで、組織と繋がっている人がいる。そいつに頼めば、もう少しマシな情報が手に入るかもしれない。分かったら連絡した
いから、連絡先を教えてくれ。」

イスはしばしの沈黙の後、こう答えた。

「此処だ。」

「は？」

意味が分からなかった。無理もない、連絡先を聞いてそんな返答を
されて理解できる人がこの世に何人居ようか。

「だから！此処、地下下水道が連絡先だ。訳あって此処に住んでる
んだよ。」

「……………」

「……………いや、気まずいから何か喋ってくれないか？」

「どうやら、かなりスペシャルに分けありのようね」

「ああ、まさかの此処が家ですか。」

まあ、無理もない。彼らも先ほどから、十分この地下下水道の臭い
と吐き気を催すような光景と居住環境の悪さを体験し、さっさと此
処をでたいと思っていたのである。そこでまさかの毎日暮らす輩が
居ようとは、世の中は広いものである。

「俺だってな！好きでこんな所に暮らしているわけじゃないんだよ
！」

「だから、訳有りなんですよ？」

「ああ、まあその訳は話すことはできないんだが。」

「いいさ、命の恩人にあれこれごちゃごちゃ聞きはしねえ。」

「有り難い。それと、もう一つ聞きたいことがあるんだが。」

「何だ？」

「町の誰にも姿を見られることなく国王と直で連絡を取る方法はないか？」

無茶苦茶な相談である。国王とは、漢字の通り、一国の「王」なのである。普通にやっても、城の物をとうしてさえ、すぐに連絡を一般市民（彼は今は一応ただの一般市民である。）がとることなど至難の業。ましてや直でなど不可能だ。だが、オーシュは不適に笑い答える。

「あんた、俺を誰だと思ってるんだ？俺はウイングストニアで五本の指に入る盗賊だぜ。国王に直で連絡を取るくらい余裕余裕。」

「（自称）五本の指に入る、ね。」

「………、う、うるさい。で、具体的にどうしてほしいんだ？」

「………、手紙を、届けて欲しい。」

「ん、何だ、それだけでいいのか？」

「いや、それだけって、手紙を臣下の者に見られたりしてはいけないのだぞ。飽くまで、『直で』陛下に届けるのだ。」

「いやいや、分かってるさ。お望みならば、直で謁見室まで連れて行ってやつてもよかったんだけど。」

「マジか？」

「オーシュ、できないことを言うのはやめなさい。イスが手紙を届けてくれて言う前は無茶な注文が来たらどうしようって、怯えてたくせに。」

やはり彼にもそこまでではできないようであることがエリシアによって暴露された。

Episode 7 計画（後書き）

余談ですが地下下水道って居住することは可能なんじゃないかな？

Episode 8 〜テイルギス宣戦布告〜

一国の国王ともなると、常に誰か臣下の者がそばにいるものである。一人だけになるときなどほとんど無い。というか、無い。だがまあ、完全にはないというわけでもない。が、しかもちろんそんなときでも声を出せば聞こえる程度の距離にもちろん誰か人はいる。だから、こっそりと近づこうというのは基本不可能なのだ。基本的には。

「おはようございます！！陛下。」

「ああ、おはよう。」

何気ない城の少年兵士と廊下でのすれ違い。だったはずなのだが、ギリアがいつの間にかポケットに入っていた手紙に気づいたのは、私室に入ってからだった。「基本」が通じない人間もいるのである。

「ギルスが手紙をよこしてきた。」

「……………、どうやって!？」

リアを呼び出して、召使い達を追い出して（召使い達が部屋から出る際、かなり小声で話をしていた。）ギリアが話し始めた内容に、リアが驚くのもお分かりだろう。

「……………、なんか、気づいたらポケットに入ってた。」

「はあ！？それ本物？」

「……………多分。筆跡はギルスの物だし、内容もあながち嘘とも思えん。」

「まあ、いいわ。それで、なんて言ってきたの？」

「暗殺の噂は本当だったらしい。」

「……………そう。」

「『ホライズン水平線』という秘密組織がそういう計画をしている、という情報が入ったらしい。」

「彼が調べたの？」

「いや、何でもかなり心強い味方ができた、とか。今度会うことが

あつたら詳しく紹介したいらしい。」

「それは頼もしいわね。彼一人ではいくらか不安だったし。」
「酷い言われようである。」

「でも、そうなるといよいよ不思議ね。」

「ああ。そういった気配がなさ過ぎる。」

暗殺を企てるとなると、事前にいろいろと下調べが必要な物である。目標が一国の王ともなるとそれはかなり綿密な物になる。勿論ばれないように上手くした調べは行つ物なのだが、やはり多少はそういった動きを感じ取られてしまう。少なくとも二人はそれを感じ取る自信がある。が、それを全く感じない。

「調べをする物がかなり上手なのか。」

「その情報がガセなのか。」

「もしくは……。」

そこで二人が同じ考えに至ったのと、臣下の一人がノックもせず部屋に駆け込んできたのとは同時だった。

「イス！大変よ！！」

「エリシア！？」

イスの元へ駆け込んできたエリシアの様子は、かなり深刻な物だった。

「水平線ホライズンの作戦が分かったの！彼奴らは、暗殺をするために戦争を起こすつもりなのよ！！」

「はあ！？」

「詳しい話は後よ！今、ティルギスの軍勢がこっちに向かつてる。明後日にもウイングストニアの国境に到着するわ。」

「何だつて！？」

「ティルギスのレリシス王はやる気満々で攻めてきている。ウイングストニアの戦力を考えても五分五分かなとオーシュが言ってた。」
「城に行かなければ！何か方法はないのか？」

「そういうだろうと思って、今オーシュが貴方を城に忍び込ませる

方法を探ってる。分かり次第、ここに来るはず・・・。」

「そうか、ありがとう。」

一国の王の暗殺はもちろんそうそう簡単ではない。周辺には厳重な警備がしかれているし、しかもギリヤ王自身もなかなか強い。だが、周辺の警備だけでも弱まれば、いくら生う自身が強くても事情は違ってくる。背後を狙うもいいし、大勢で掛かってもいい。そして、戦争が起これば、その条件を上手い具合に満たしてくれるというのだからありがたい。

「や、久しぶり。」

落ち着いたオーシュの挨拶を聞いたのは、それから数分後だった。

「ティルギスの軍勢は3万！我が軍はすぐに国境に集められるのはせいぜい1万！周辺の領主の軍勢にも連絡をとりましたが、軍勢の到着は早くてもあと3日は掛かるでしょう。」

「・・・、国境付近の領主の軍勢総出で国境を守らせる。絶対にティルギス軍をウイングストニア国内に入れるな！！」

「はっ！！」

大体の指揮が終わり、一段落ついたところで彼はリアに話しかけた。
「どう思う？」

「いくら何でも急すぎるわ。ティルギスのレリスはあまり賢くはないという噂を聞くけど、馬鹿じゃない。」

「ああ、宣戦布告の理由も国境付近のウイングストニアの領主の狼藉が過ぎると言うほとんどこじつけみたいな物だしな。」

「と、なると予想が当たってしまったみたいね。」

「ああ、的中だ。どうも俺は悪い予感ばかり当たるという変な特性があるらしい。」

「奇遇ね。私もよ。ところで、勿論貴方も行くんでしょ。」

「ああ、本軍をつれて今すぐにも行きたいところなのだが・・・。」

「

「ギルスね。」

「ああ、行く前にあいつと連絡を取りたい。何とかならない物か・・・。」

もう夜も近い時分だった。

Episode 8 〽テイルギス宣戦布告〽（後書き）

すいません。間を開けてしまいました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6829a/>

メタリックフェザーズ

2010年10月9日05時44分発行